

原子力委員会定例会議

2023年5月23日(火) 14:00-15:00

リスクコミュニケーションについて

土田 昭司

[関西大学 社会安全学部]

リスクコミュニケーション (=リスクについての情報交換)

- クライシスコミュニケーション
crisis communication 危機
- ケアコミュニケーション
care communication ケア
- コンセンサスコミュニケーション
consensus communication 合意

コンセンサスコミュニケーション

1. publicにおいて賛否が分かれるリスク問題について
 2. ステークホルダー(関係主体)間で
 3. 合意形成をはかるための話し合い
- 「個人、集団、組織間での情報および意見の相互交換プロセス。リスクの特性に関する種々のメッセージや、関心・見解の表明、またはリスクメッセージやリスク管理のための法的および制度的な取り決めへの反応なども含む」 (National Research council, 1987)

コンセンサスコミュニケーションの本質

- 「対象のもつ情報、ことにリスクに関する情報を、当該リスクに関係する人々に対して可能な限り開示し、たがいに共考することによって、問題解決に導く道筋を探す社会的技術」(木下,2006)
- 「関係者の信頼をもとに(ないしは信頼を高めながら)行うリスク問題解決に向けての共考の技術」(木下,2008)
- 双方向のコミュニケーション = 双方に変化
- 成果ではなく、プロセスが重要
- 情報提供・教育・説得ではない
- **信頼形成** = 事故を起こさないこと

危険に対する心理的対応

- 「恐怖」＝明確な危険を認識したときの感情
 - 対応策：
 - a.** 逃げる（自分だけは安全な状態に移動）
 - b.** 危険そのものを消去する
- 「不安」＝不明確な危険を認識したときの感情
 - 対応策：
 - 1. 危険が確かにあるのかを探索する
 - 2**a.** 危険が明確になる → 「恐怖」に移行
 - 2**b.** 危険が見つからない → 1.に戻る or 3**b.**へ
 - 3**b.** 心理的緊張（不快）
 - (逃げる可能なら) 4**b1.** 対象が危険であると決めつける → 「恐怖」に移行
 - (逃げる不可能なら) 4**b1.** 対象が安全であると決めつける

「安全」の定義

- 安全 = 「許容できないリスクがないこと」

Safety = “freedom from risk which is not tolerable”

[ISO/IEC guide 51, 2014]

ISO guide 51, 2014が含意すること

1. 「完璧な安全」は存在しない
2. 安全は、程度の問題 = 「より安全」 / 「より安全ではない」
3. 安全の基準は、Publicの心理によって決定される
 - ✓ 個人・社会・組織、あるいは、文化・時代によって安全の基準が異なる可能性

「リスク(risk)」とは何か？

- リスク事象がもたらす「**危険性**」: danger, hazard
- リスク事象がもたらす「**便益性**」: benefit
- 将来における事象 = 不確実性
→ **生起確率**: probability

【リスク概念は多様 cf. 経済学からの立場】

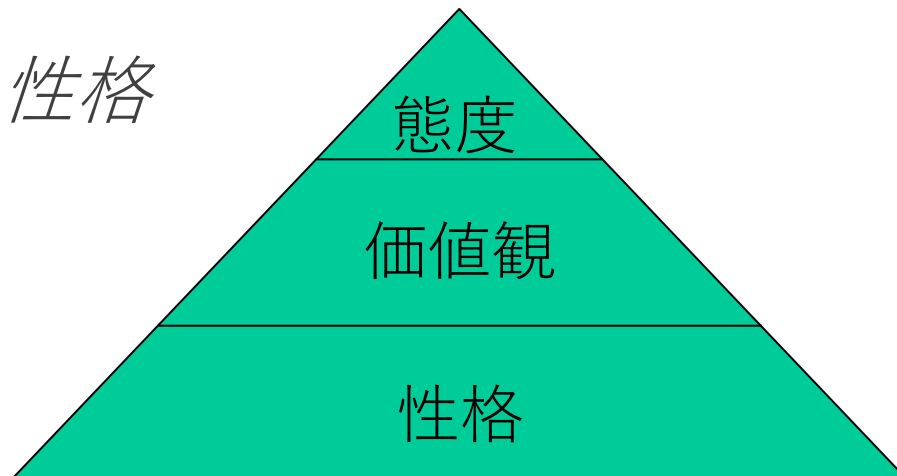
リスクコミュニケーションにおいては、「**危険性**」と「**便益性**」のどちらについても情報交換しなければならない。

便益性とは何か？

便益性 ⇒ 望ましいことの実現（＝欲）

- ✓ 私たちは、何のために生きているのか
- ✓ 安全という「価値」（価値＝「手に入れておきたいもの」）
- ✓ 価値[安全]をそれ以外の価値と対比する視点の有無
- ✓ 何を「価値」と見なすかは個人・組織・社会による

態度－価値－性格



「安全」のための施策

便益性 [コスト] からの論点

ALARA基準： As Low As Reasonably Achievable

- a. 経済的制約
- b. 人的制約
- c. 時間的制約
- d. . . . etc.

How safe is safe enough?

「一体どこまで安全にしたら十分安全だとみとめてもらえるのか？」

↑

ゼロ・リスク認知（危険はゼロでなければみとめられない）

推進側の立場でなければ

原子力利用にはALARA基準が適用されない。

時間・空間・社会スケール

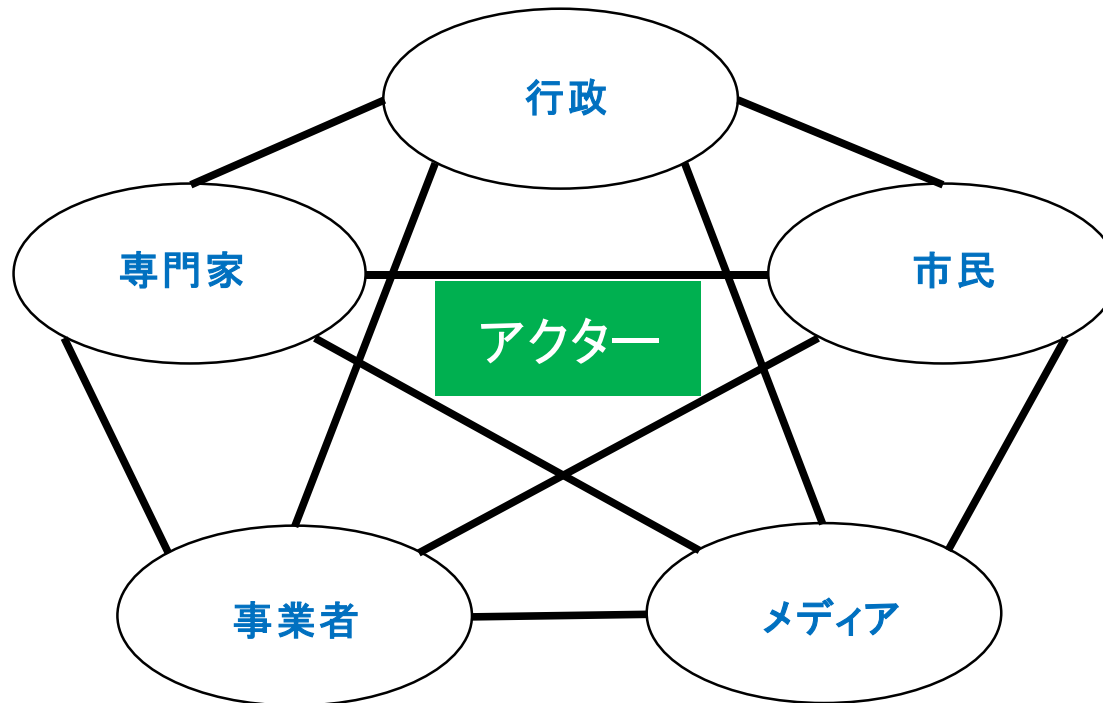
一時的／短期的	中期的	長期的／恒常的
地域	広域／国	国際・地球規模
個	少数	多数／集合的

フェイズ

回復期

非常時（緊急時）

平常時



目的・機能

教育・啓発

行動変容

信頼と相互理解

問題発見 議論構築
論点可視化

価値観の調整
合意形成 協働

回復と和解

単純

複雑

不確実

多義的

知識の不定性

ハザード種別

自然災害・疾病

従来科学技術

先端科学技術
萌芽的科学技術

科学コミュニケーションセンター(CSC)[科学技術振興機構(JST)](2014)

表1 米国におけるリスクコミュニケーションの発達段階

時 期		I 期 (1970s 半ば～80s 半ば)	II 期 (1980s 半ば～90s 半ば)	III 期 (1990s 半ば～)
主 体	情報伝達	専門家 ⇒ 非専門家	専門家 ⇒ 非専門家	専門家 ⇔ 非専門家
	意思決定	専門家	専門家 ⇒ 非専門家	非専門家（当事者）
情報の内容		リスクデータ	リスクデータ	リスクデータとリスクに関連する情報や意見
目 標		情報公開	説得	相互理解
社会的背景		小 ←──		

Leiss(1996) [原田(2007)より]

リスクガバナンス

1. トップダウン型

優秀な科学者・技術者・行政担当者が、最適と考える安全対策を考案・実施して、一般市民に指示・命令する

2. ボトムアップ型

「成熟した」民主主義社会：一般市民が自ら安全対策について考え実施することを希望する

- 民主主義社会
 - 権力の平等化
 - 財の平等化
 - 教育の平等化
- 高度情報化社会
 - 情報の平等化
 - ニュースバラエティ番組などメディアによる解説能力の向上

→ 誰にでもリーダーになる能力がある。



「成熟した」民主主義社会
and / or
「一億総評論家」時代

- 自分は専門家や権力者と等しい情報に接しているとの信念
- 自分には専門家や権力者と同等あるいはそれ以上の判断能力があるとの信念

情報の流れ [有から無に向かって流れる]

- 単純な情報・知識
- 複雑な情報・知識
- 不確実な情報・知識
- 曖昧な情報・知識

・ 危険や便益についての専門的情報

専門家 → 事業者・行政 → メディア → 市民

- ✓ 事業者と市民では専門的情報についての理解が異なりやすい
- ✓ 多数の市民には専門的知識を理解しようとする動機がない
- ✓ 社会的分業を認める = 信頼

・ 何を危険・便益と見なすかについての情報

市民 → メディア → 事業者・行政 → 専門家

◆ 21世紀のリスクコミュニケーション研究が取り組むべき課題

【文献】

木下富雄 『リスク・コミュニケーションの思想と技術: 共考と信頼の技法』 ナカニシヤ出版 (2016)

文部科学省(2017)リスクコミュニケーション案内

土田昭司 (編著) 『安全とリスクの心理学』 培風館 (2018)

土田昭司 リスクコミュニケーション, 日本リスク研究学会(編) 『リスク学事典』 丸善出版 (2019)